

三つの心

2021.7.7

本校の先生方には、三つの心が満たされるような仕事をしてほしいと考えている。一つは、生徒ならびに保護者、一つが、一緒に働く同僚、仲間、そして最後が自分である。教員というのは、この三者の心が満たされることで、よい仕事ができると思うのである。

ところが、言うは易し行うは難しで、これが難しい。多様化、複雑化する社会の中で、一人一人の生徒に寄り添っていくのは、並大抵のことではない。まず、生徒ならびに保護者の心を満たすことが最も困難である。それでも、教員は、悩み、苦しみながらも努力し続けなければならない。

生徒と心が通じ合えたかどうかは、生徒が卒業し、クラス会の際にでも話すことで、ようやくわかることなのかもしれない。学校行事や卒業式のときなど、心が通じ合えたと思えることもあるかもしれない。だが、本当のところは、卒業後にわかるように思う。大切なことほど、後でわかるものである。

保護者とは、全員というのは難しいが、学級通信をきっかけにやりとりをするようになったことがある。部活動でお世話になった保護者の存在も大きい。年に数回しか話すことがない保護者でも、お子さんのことで通じ合う感覚が持てる場合もある。

共に働く仲間である同僚の心を満たすことはできるのであろうか。これも簡単なことではない。だが、決して不可能なことではない。ベクトルが同じ方向を向き、互いに補い合いながら、それぞれの持ち味を生かし、生徒のためにという志をもって前に進んでいけば、きっと心は満たされる。同僚として、お互いに切磋琢磨できる仲間であれば最高である。

6年間、一緒に働いたからと言って、心が満たされるわけではない。たった1年でも、心と心が触れ合い、その後もずっと連絡を取り合う間柄となることもある。大切なのは、時間の長さではない。中身の濃さである。共に苦しみも喜びも分かち合い、思いを共有できたかどうかである。

教員をやっている、自分の心が満たされることなどあるのだろうか。これには、個人差が伴う。これからは、この自分の心が、キーポイントとなる。たとえ忙しくても、苦勞はしても、心が満たされれば、多忙感や疲労感はある程度は抑えることができる。ただし、これも容易なことではない。

大切なのは、教員としての「志」ではなからうか。先生方は、何かしら持っているはずである。普段はそれを口にすることはしない。改めて、それを言葉にしたときに、志という言葉を使うかは、その人による。教員魂、教員根性のようなものも備わっているだろう。そうでなければ、やっつけものではない。

結局、三つの心とは言ってみたものの、その困難さが浮き彫りとなった。要は、心の問題である。生徒や保護者と心が通じ合えるかどうか。仲間、同僚と心が触れ合えるかどうか。教育は、心が決めるのである。

生徒、保護者の心を満たし、仲間、同僚とともに、心豊かに働き続けることが、教員の醍醐味である。その醍醐味を味わってもらうために、校長として、できることは何か。最近では、そんなことを考えている。